

確かな「活用力」の育成
— 子どもがつながる授業を通して — 国語 第6学年
珠洲市立正院小学校

1 研究の概要

本校は、石川県教育委員会及び珠洲市教育委員会から「平成 20・21 年度児童生徒の『活用力』向上モデル事業」の指定を受け、「確かな『活用力』の育成」を研究主題に掲げ、思考力、判断力、表現力等の育成に取り組んできた。「活用力」を育成するには児童同士のかかわりが重要であると考え、児童が相互にかかわり合い、つながりあう授業をめざすとともに、課題を見つけ解決する授業の中から「活用力」が育つと考え、4段階の学習過程を設定し、その各段階の指導について研究を重ねてきた。授業の中では、児童の気づきや発見を大切にし、児童の無意識の学びを意識化・共有化させ、「子どもが学びの主体者」となる授業をめざした。

A-1 研究構想図

2 実践内容

(1) 活用する力を育てる学習活動の工夫

① 活用する力を育てる学習活動の工夫

ア 子どもがつながる授業

子どもがつながっている授業では、子どもたちに次の5つの姿が見られると考え、その姿を求め授業を改善していくことにした。

- ・課題を共有している
- ・学習意欲がある
- ・子ども同士の話し合いがある
- ・教え合いが見られる
- ・学んだことを伝えている

イ 活用力をつける学習過程

「活用力」を育てるには、「課題解決型の授業」が有効であると考え、単元や1単位時間の授業に4段階の学習過程を設定し、各段階での効果的な指導法を追究していくことにした。その際、「既習事項の活用」と「発信（説明）活動」場面を設定し「活用力」を向上させるようにしてきた。

ウ 子どもが学びの主体者となる授業

児童は教師の指導計画・指導案とは違う場（想定外の場）でも「活用する力」を養っている場合がある。授業中の児童の発見や気づき等を見逃さず、それを学級全体で共有し合い、子どもが学びの主体者となる授業を目指した。

(2) 言語活動の充実

① 言語力を高める辞書活用

国語辞典を常時机の上に置き、引かせている。その際、付箋を用いてその取り組みが目に見えるようにし、辞書を引くこと自体を楽しむようにした。

② マインドマップを取り入れたノート

作文や思考の整理、発想が必要な場面に出会った時、全員が自主的にマインドマップを使えるようにした。「覚える力」「考える力」「整理する力」「長文や小論文が書ける力」「話す力」を向上させた。

B-1 意欲がつながる

B-2 課題とつながる

B-3 他へつながる

B-4 子ども同士がつながる

B-5 次時へつながる

B-6 自己へつながる

B-7 「活用力」をつける学習過程

B-8 辞書活用

B-9 マインドマップ

3 指導の実際

つながる授業の中で、児童の思考力・判断力・表現力を鍛えた。また、模擬授業・場面分析授業整理会で、教師の授業力を高めた。

C-1 指導案と授業記録

4 成果と課題

(1) 成果

- ・全国学力・学習状況調査活用 B 問題は、大きく伸びた。特に、国語「書くこと」、算数「記述式」における正答率は好成績となっている。質問紙調査では、「自分の考えを他の人に説明したり文章に書いたりすることを難しいと思わない。」「発表する機会や話し合う活動がある。」と回答する児童が多いことから、本校の進める学習過程の指導の成果が表れている。算数においては、新しい問題に出会ったときそれを解いてみたい」と意欲をもって学習する児童像が明らかになった。
- ・県基礎学力調査では、国語・算数すべての領域で県レベルを上回っていた。特に「書くこと」は 100 % と好成績であった。
- ・「課題とつながる」段階では、具体的な言葉に課題を変え、児童の意欲や学習活動を活発化させる実践が行なわれるようになってきた。全児童が、自分の考えを相手に伝わるように言葉や図等で表現し、課題とつながるようになってきた。
- ・「子ども同士がつながる」段階では、ペア・グループ学習を取り入れたり、立つ位置を変えながら話し合いがつながるように工夫したりする教師が増えた。その結果 8 割以上の児童が話し合いに入っていけるようになってきた。また相違点・共通点を考えながら話したり聞いたりするようになってきた。
- ・「他へつながる」段階では、活用場面を考えた単元計画や、既習事項を活かした授業展開が行われ、主張したり、提案したりする発信活動が見られた。また、意見+理由を大部分の児童が言えるようになり、図を使つての説明活動も活発になった。

(2) 課題

- ・「時間が余った」と答えた算数 A 問題に課題があった。家庭での学習習慣が少ないことも含め、ケアレスミスを防ぐ方法や、スキルアップしていく学習を、家庭と連携して取り組む必要性を感じている。
- ・児童の意識調査「書くこと」の数値が前年度より僅かに低下した。教師の要求度が高まったためと考えられる。要求度を高めながら、楽しんで日常的に文章を書くことを進めていかなければならない。
- ・『活用力』が高まる授業を日々の授業に確実に活かせるように、学習過程のパターン化を行ってきたが、子どもを「学びの主体者」として位置づけると、想定外の道筋も生まれてくる。友だち同士の学び・子ども自身の無意識の学びを意識化させる授業が必要なことが新たな課題として生まれてきた。児童がふりかえりを通して、自分の学びの中から価値を見出し向上していくそんな授業づくりをもっと深めていかなければならないと感じている。

